



学生寮にて。「歌手の卵」たちと

示唆を与え、それをさらさらとメモ書きにして渡してくれた。「まずは語学試験があるから、それが終わったらまた色々相談いたしましょう」と言いながら。そしてそこから、私の二年間にわたる留学生活が、本格的に開始したのである。

### ソルボンヌにて

今になって留学生生活をふりかえってみると、一年目の修士課程、二年目の博士準備課程それぞれ、乗り越えるべき課題も多く、いつも順風満帆というわけでもなかった。それでも、十七世紀のオペラに関するゼミ形式の講義（各人がある一つのオペラについて、研究史と一次資料に関する調査を行い、なおかつそのオペラに関する自分なりの評価を述べるもの）など、いくつもの興味深い講義に参加することができたのは幸運であった。分野が分野だけに、講義を受ける学生の方にも、若い人だけでなくかなり年齢の高い人が交ざって

いたのだが、それがまた議論の場に心地よい緊張感をもたらしていた。また、大学と並行してコンセルヴァトワール（音楽院）で演奏実技を学んでいる学生も少なからずいて、「演奏家の視点」を強く打ち出しながら研究発表をする彼らに、これまた大いに刺激を受けた。要するに、本を通じてだけでは学び得ない「何か」、人と直接対面することによって得られる「何か」を、この留学期間に多く学ばせていただいたように思う。このことは、論文執筆に際しての指導教官との関係についても言える。「こんな文献にあたった方がよい」「こういう方法論を用いた方がよい」といった具体的な示唆ももちろん有益であったが、それ以上に、研究者としての彼女の生き方を間近に見られたことが、その後の自分の研究活動に大きな作用をもたらしていると感じている。

### 現在の活動、そして今後

フランスでの留学を経た後、東京藝術大学で修士号、博士号を取得し、現在は十八世紀から十九世紀にかけてのヨーロッパの舞踊理論と劇場舞踊の実践についてさらに研究を進めている。ありがたいことに、音楽教科書のテキスト執筆をはじめ、研究を通じて得られた知識を出版・教育の場で活かす機会も与えられているので、こういった機会を大切にしながら、「社会の中で自らがなすこと」に今後とも力を尽くしていきたいと考えている。

**中央公論 5月号 発売中!** 定価800円(税込)  
〒104-8320 東京・京橋2-8-7 中央公論新社  
TEL 03-3563-1431

**アメリカの失墜、日本の低迷**  
「大恐慌の再来」とその後の世界 竹森俊平  
「過剰」の時代の終焉と「摩擦」と「再編」の時代の到来 田中直毅  
「弱いドル・弱いアメリカ」を覚悟すべきだ 大場智満  
〈日銀総裁空席、ガソリン税迷走……〉  
「武藤でも構わない」  
が覆った内幕 鳩山由紀夫

特集 **知的整理法革命** 野口悠紀雄／梅田望夫／外山滋比古／佐藤 優／勝間和代／茂木健一郎

チベット問題の真実 ペマ・ギャルポ 特集 **学校の教師はダメなのか**

# 出会いに学んだ留学生生活

国際文化教育交流財団一九九四年度奨学生。一九九二年東京藝術大学楽理科卒業。一九九四年より一九九六年までパリ第四大学に留学。一九九七年東京藝術大学大学院修士課程修了。二〇〇二年東京藝術大学大学院博士号取得課程単位取得満期退学、二〇〇三年同校より博士号取得(音楽学)。東京藝術大学、明治学院大学、立教大学、新国立劇場バレエ研修所ほかで講師を務めた後、現在は、舞踊・音楽関係の研究執筆活動に従事。



元東京藝術大学  
非常勤講師  
森(菅谷)立子  
もりすがや たつこ

一九九四年から一九九六年までの二年間、石坂財団奨学生としてパリ第四大学で学ばせていただいた体験は、私にとってかけがえのないものとなっている。

そもそも、舞台芸術、とりわけバレエの起源に興味を抱いたことがきっかけで、研究の道志すようになったのだが、研究を進めれば進めるほど、現地で直接資料にあたらなくては、この思いが強くなっていった。と同時に、研究史の浅い分野ゆえにおおさら、現地専門家と接触して最新の研究動向をふまえておく必要があるのではないかと考え始めるようになった。そんな折に、石坂財団が奨学生を募集しているとの情報を得て、さまざま応募を決めたわけである。当時、フランスの舞台芸術史を専門とする学生を対象とした奨学金制度はそれほど多くなく、この機会を逃しては、という気持ちが強かったことを記憶している。本当にありがたいことに、審査を経て奨学生に選んでいただき、念願し

ていたフランスでの留学生生活が実現することとなった。

## 所属機関決定まで

私が所属していたのは、パリ第四大学(ソルボンヌ校)の音楽学研究所である。「バロック期とそれ以前の西洋音楽史を大学で学ぶならソルボンヌでは」との大先輩の助言を受けていたので、所属機関を決める際に、最初からこの大学を視野に入れていた。だがそれよりも大きな決定要因となったのは、指導教官の存在であった。というのも、フランスでは指導教官の権限が非常に強く、まずは指導教官が「あなたを指導します」と許可してくれないければ、学生生活を始めようにも始められないシステムになっているからである。したがって、自分の研究テーマに共感を示し、しかも適切な助言を与えてくれそうな指導教官を探すが、学校登録にあたっての最初の課題となる。

●国際文化教育交流財団は、経団連第一代会長故石坂泰三氏の遺徳を記念し、一九七六年に設立された。これまでに、世界三一カ国の大学・大学院へ一七二名の日本人留学生を派遣するとともに、世界三七カ国四九〇名の外国人留学生への奨学金の供与や講演会等を実施してきている。

幸運にも、ソルボンヌには十七世紀フランス古典音楽の専門家が教授として在籍しており、その頃十七世紀末の舞台芸術の一ジャンルについて勉強していた私は、一も二もなくこの教授に指導を乞うことに決めた。といっても、当時まだ日本ではそれほど知られた存在でなく、私自身いくつかの論文を通して知るに過ぎなかった教授に、どのような形で連絡をとったらよいか、いくばくかの躊躇がなかったと言ったら嘘になる。とは言え、躊躇しては何も始まらないので、恐る恐る手紙を書いて(当時はまだEメールが一般に普及していなかった)待つこと約一カ月、「あなたを受け入れたらいいと思います、まずは面接をしてから詳しいことを決めます」との返事を手にした時には、ああようやく第一の関門を越えたと思ったものだった。

翌年夏、実際に教授に面会するため、大学のオフィスを訪れると、一見大学人には見えないほど(?)素敵なマダムが座っていらしたので、私は不意を衝かれて一瞬言葉に詰まっってしまった。しかし、教授は初対面の私を前に、実にてきはきと、これからこの機関で学ぶべきこと、私の研究の方向性などに関して